第2群の座長をつとめて

田　川　真知子・相　川　みづ江
(県立中央病院)

石川看護研究会は，今回（第14回）から学術集会と改められ，研究発表会も従来とは趣が変わり「演題発表・ミニシンポジウム」がおこなわれました。
座長は二人でしたので，1席2席は田川，3席4席は相川が担当致しました。

1席の上田良子さんの発表は患者のキーパーソンである家族を入院時より看護の対象としてとらえ，積極的に取組をした結果，介護意欲の継続につながることを実証した研究でした。

2席の田知本みどりさんの発表は長期入院患者8例の患者について，その家族，医師，看護婦，三者の考え方の違いを明らかにすることで，それぞれの立場での思いが明確になった研究でした。

日頃臨床の場で勤務している者として，一番苦しい思いをしているのは患者さんですが「病んでいるのは患者さんだけではない」家族も共に悩み苦しんでいるので家族との関わりの必要性，重要性を強く感じて接していますが，家族の受け入れのいい人，悪い人，家族背景も様々，いろいろな複雑な状況の中で，その患者さんにとって一番良い方向づけが出来るよう，他の職種との連絡をとりながら早い時期より計画的に取り組んでいく必要性を改めて示唆された貴重な発表だったと思います。

3席の不破奈津子さんの発表は，看護活動に患者参加を行いその事に対する看護婦と患者の意識調査をされ，これらの意識と健康，病気のとらえ方の関係をも明らかにする研究でした。

看護活動，看護ケアプロセスに，患者さんが参加するという今後価値のある研究だと思います。看護のインフォームドコンセント，所謂看護婦の一方的なケア計画・実施ではなく一人一人の患者さんの看護上の問題に対して，解決するケア内容を患者あるいは家族に提示，説明し，その人に最もあった方法を，患者あるいは家族の同意のもとで行い評価する，その事が患者自立を促し，患者満足になるのではないかと思います。

4席の長屋由美子さんの発表は，臨床実習における看護学生の主体性に関する研究でした。教員，指導者に対する働きかけを調査され，看護学生の臨床実習での主体性について，行動の76%がケアーの判断や記録方法等について援助を求め，又確認を行っているということが明らかになりました。

この事を（詳しくは抄録集参照）各施設の臨床実習現場で共有し，役立たせて頂く事を望みます。

今回，座長という貴重な役割を与えて頂き，演題発表・ミニシンポジウムの実行委員長の古木優子先生初めレポーターそのほか多くの方々にご指導頂き有り難うございました。最後になりましたが今回の研究者の皆様の益々のご活躍をお祈りいたします。